

■今年度の活動内容設定時に参考とした「他校の環境に関する取組」 [重点環境目標] 1. 地域の環境や地球環境の保全について学習します。(環境教育) 2. 電気、水、紙などの資源を大切にします。(省エネ、省資源) 3. リサイクルをはじめ、廃棄物を削減に向けて取り組みます。(廃棄物削減)						■今年度のグリーンカーテン実施状況 (朝顔、ゴーヤ、へちまなど) ■実施した <input type="checkbox"/> 実施していない	
取組テーマ	取組目標	具体的な活動内容		担当者	活動主体	取り組んだこと、その実績	1年を振り返って
いきものみどり	植物の育成等を通して、子どもたちの自然を大切にすることを育てます。	1	土を再生し、農作物を育てる。	1年各担任	1年生 教職員	・土の再生に関心をもって野菜栽培に取り組んだ。種を集めて観察する活動を通して、生命の循環について考えた。  ・一人一鉢、花を育て、成長していく様子を観察し、学習記録カードを書いた。国語の「すがたを変える大豆」と関連付けながら大豆が様々な食品に変化するということを学ぶことができた。  ・理科「季節と生き物」の学習と関連させ、継続的に観察を行いながらツルレイシを大切に育てた。ツルレイシの水やりを自主的に行ったり、雨風の強い日には鉢を安全な場所に移動させたり、植物を大切に思う姿が見られた。  ・5年生が講師の先生の指導を受けながら、田んぼ学習を行った。田植え・稲刈り等の体験を通して、農業に携わる方の喜びや苦勞を知ることができ貴重な経験となった。	【取組の評価】 <input type="checkbox"/> 達成できた ■ほぼ達成した <input type="checkbox"/> 達成できなかった 【理由】 ・活動を通して自然環境を再体験・再発見し、子どもたちの「自然」に対する見方や考え方に変容が見られた。 【今後の課題】 ・他学年への接続や、地域とともに学ぶ環境教育の推進。 ・大豆を様々な食品に変化させる体験ができるような機会の設定。 ・実体験に基づく命の尊さへの学びと道徳を関連させた学習の推進。 ・植物に興味をもった子どもは自主的にツルレイシの様子を見るなど、習慣的な観察を継続した。なかなか興味をもてなかった子どもは、理科の授業における観察にとどまった。 ・田んぼに「ジャンボタニシ」が発生してしまい、児童がタニシやその卵に触れてはいけないということで、収穫時期に稲刈りを行うことができなかった。 【次年度への引継ぎ事項】 ・5年生の田んぼ学習を実施するためには、「ジャンボタニシ」が発生したときにどんな対応をしなければならないのかを検討する必要がある。
		1	生活科で花を栽培して観察を行う。	2年各担任	2年生		
		1	ヒマワリ・ホウセンカを育て、成長過程等を比較しながら観察する。	3年理科担当	3年生		
		1	ツルレイシを種から育て、よく育つための条件を学習する。	4年理科担当	4年生		
		2	緑のカーテンを育てる。	4年理科担当	4年生		
		1	鈴木國臣さんから田んぼの講話を聴く。	5年各担任	5年生		
		2	田植え体験をする。	5年各担任	5年生		
		3	収穫したお米の販売を行う。	5年各担任	5年生		
資源・4R 廃棄物削減の取り組み	地域の環境や地球環境の保全について学習します。	1	ゴミがどこへいくのか、学習する。	4年各担任	4年生	・社会科の「ゴミはどこへ」の授業を通して、ごみの処理方法やその課題についての理解を深めた。また、ごみ削減の意識向上が図れた。	【取組の評価】 <input type="checkbox"/> 達成できた ■ほぼ達成した <input type="checkbox"/> 達成できなかった 【理由】 ・社会科の「ゴミはどこへ」の授業ごみの処理方法などについて、知ることができた。 【今後の課題】 ・環境事業センター、寒川広域リサイクルセンターに行って見学することができていたら、さらに良かったと思う。
		2	電灯・換気扇といったもののスイッチをこまめにオフにしたり、水道の蛇口をしっかりとしめたりすることを推進する。	全職員	教職員		

●写真等の記録:活動や発表の風景等取組の記録を、必要に応じて添付してください。写真等の下に、キャプションをご記入ください。個人情報の取り扱いにご注意ください。

写真

写真

●学校長(推進責任者)によるコメント

【学校長名】

安倍 武雄

【今後の方向性について】

取組の評価において、どの学年もおおむね良好な評価となっている。これも、特段「エコ」「環境」「SDG's」と銘打つことなく、それぞれの教科や領域において子どもたちの発想や思考に寄り添う形で学習を進めることができてきているからだと考える。

今後も、「エコ・環境...を教える」のではなく、子どもたちの学びの結果が「エコ」「環境」「SDG's」になるよう教育課程の工夫をこらしていきたい。